

「主は深くあわれんで」

—マタイによる福音書講解説教 47—

エレミヤ書 第23篇 1節～4節
マタイによる福音書 第9章 32節～38節

説教 岡村 恒牧師

群衆が、飼う者のない羊のように弱り果て、倒れているのをご覧になって、主イエスは深く憐れまれました。聖書では、この「憐れむ」という言葉は内臓にかかわる言葉です。内臓がえぐられるように、主は私たちを憐れんで下さり、お心にしっかり留めて下さった、聖書はそう記します。

マタイによる福音書第9章の後半で、二人の目の見えない人が主イエスによって目を開かれ、見えるようになった出来事が記されています。それに続いて、今度は口のきけない人が語り出します。洗礼を受けて、信仰を与えられて生きるとはどういう事か、この二つの奇跡物語は明らかにします。

当時の社会では、回復しない病気は悪霊のしわざと考えられました。「人々は悪霊につかれて口のきけない人をイエスのところに連れてきた。すると、悪霊は追い出されて、口のきけない人が物を言うようになった。」(マタイによる福音書 第9章32節～33節)この人はこれからの生涯、何を語って生きていきましょうか？主イエスのことを語ったに違いないと思うのです。あれだけ苦しみ、絶望を味わっていた自分が、あの日、主イエスの前で舌がほどけ、語るようになるようになった。これは神の深い愛によることだ、この一点を彼は、繰り返し語ったに違いないと思うのです。

主イエス・キリストは私たちを目の見えない暗闇から、口のきけない絶望から解放するために来て下さいました。神ならぬものにひれ伏し、無力に歩む者は、真実を見ることができず、神に対して語るべき言葉を持たないのです。「群衆が飼う者のない羊のように弱り果てて、倒れている」(36節)姿、それは主イエス・キリストに出会う前の全ての人間の姿だと、聖書は語ります。主イエスは、囚われ、閉じ込められ、口を開くことを許されない私たちを、解放するために来て下さった救い主です。

ここで、主イエスの敵対者が登場します。パリサイ人です。律法を厳密に守り実行すること

で救われると固く信じる人々です。彼らは、イエス・キリストが神から遣わされた存在だということが、どうしても受け入れられませんでした。特別な奇跡を見たときも、何とかしてそれを否定しようと躍起になりました。

マタイによる福音書は、主イエス・キリストが地上に來られた動機を明らかにします。この私を、悪霊の支配としか言いようのない絶望から解放しないではいられない、その憐れみが全ての動機だと描くのです。「わたしはよい羊飼いである。よい羊飼いは、羊のために命を捨てる。」(ヨハネによる福音書 第10章11節)そう宣言して十字架におかかりになったのが主イエス・キリストです。

主イエスは、どこか遠くで見ている、多少の脱落者など見過ごしてしまうような羊飼いではありません。ひとりひとりを深く憐れんで下さるお方です。ですから、主イエス・キリストは私たちに祈るようにおすすめて下さいました。連れ帰るべき羊は多い、私はその一匹が減ぶことも見過ごすことはできない。だから、父なる神に願いなさい、と。私たちひとりひとりを、仲間の羊をよい羊飼いのもとに連れて行くためにお使い下さい。そう祈り求めたらよいと。

聖書ははっきり宣言します。神のひとり子イエス・キリストを救い主として信じる者は、もう裁かれることはない、永遠の命を持つものに変えられる、と。この約束は真実です。主イエス・キリストは今も生きておられ、私たちの為にとりなしておられます。神の国に迎え入れられる時まで休むことなく働いておられます。私たちが深く憐れんでおられるからです。かた時も私たちが忘れることはありません。

やがて終わりの日に、憐れみの主は再び来て下さいます。私たちを、ご自分のみそばにおらせるためにです。憐れみによって私たちの目を開いてこの救いの真実を見せて下さり、私たちの口を開いて、主を賛美して生きる者にして下さいます。こうして私たちに、主の憐れみのただ中を歩ませて下さるのです。

(記 説教要約奉仕者)